

片岡良一

『明暗』と『虞美』

人草』と『猫』と



『明暗』と『虞美人草』と『猫』と



『明暗』はかなり『虞美人草』に似ている。主人公津田は瀧澤克巳のいうように代助を経た小野さんであろうし、お延はむろん藤尾であろう。藤尾の母が甲野さんの旅行中に一仕事しようとした役廻りを、吉川夫人が引受けて、津田を温泉にやった間に一仕事しようとしているし、清子はいうまでもなく糸子に当る。小林を浅井の吹替えといつては多少いい過ぎになるかも知れぬが、とにかくそういう人物の配置がかなりよく似ている上、彼において藤尾やその母の我執や狡く小ざかしい智慧を甲野

さんや宗近さんのまことや叡知と対比しているかたちは、ここにも多くの人々の我執や小ざかしい智慧と清子の叡知との対照となって現れている。だからもし『明暗』が中絶することなく終り迄書上げられたとしたら、その終りで誰かが死ぬのではないかと想像されぬこともない。そうしてそれは事によるとお延であるかも知れない。現に小林がそういう運命を見通したような冷笑的な注意をお延に与えてもいる。そうならばこれは正に『虞美人草』通りであるわけだが、一方では近く大きな勇気と力を発揮する機会が来そうだと予言している彼女は、存外

そういう悲劇の当事者ではなくて、かえってその立会人であることになるのかも知れない。とすると、その当事者は津田の方になるのかも知れない。病後故に引止められるのを怖れて医者にも相談せずただ一人温泉などに出かけた軽はずみを作者がわざわざ指摘している辺りに、そういうことへの漱石らしい伏線があるともいえるし、はじめから「切開」という「根本的の手術」をされねばならぬ病人として描き出されている彼が、肉体だけではなく精神的にも或る荒療治を予定されているようなことは、小宮豊隆以来すでに幾度かいわれていることでもあ

る。彼は少くとも一応は罰せられずにはすみそうもないのである。が、その場合にも、彼の温泉行きが、病後のことであるだけ、作者自身の修善寺行きを匂わせているので、彼もまた出血か何かで死にかけるだけで、そこから逆に、よりよき心境を得て、立直って来る公算の方が多そうにも思われる。お延が勇氣と力を發揮するということも、そういう運びに結びつけられぬこともない。

いずれにしても、そういう想像は、すでに書かれている範囲の清子の理想化の仕方や、彼女と他の主要な女性達や津田との対比の仕方ないし芥川龍之介のいわゆる



「老辣無雙」の我執やエゴイズムの剔出し方などと合せ  
て、この作の終りを、『虞美人草』のそれと同じような、  
「生か死か」の問題にぶつかった人間達の、第一義がさ  
かんに活動しはじめるかたちになるのではないかと思わ  
せるわけだ。そういう面から見た作者は、『虞美人草』  
の作者として裁く人であったのと同じように、やはり裁  
く人としての面影をのぞかせていたことになるのである。  
毎日『明暗』を書くのを苦にして、その一回分がす  
んだ後では、まるでよごれた手を洗うような気持で、絵  
や漢詩の制作に逃れたということなども、それを側面か

ら語る事実になろう。

にもかかわらず、お延はもとより津田やお秀さえも、決して作者から単純に憎まれてばかりいるのではない。彼自身の天から与えられた自然だとして、露悪的に生きている小林の場合を別にすれば、この作中では最も不愉快なものであるお秀の我執や吉川夫人のおせっかひさえ、根本的には彼女等の善意と結びついたものであることを、作者は出来るだけはつきりと説明しようとしている。善悪一如——といっていけなければ、その二つが一つのものの裏表なのであることを、作者はこうして深く

見つめようとしているのである。そこにそれまでの作者のたどって来た道があった。その道の究極である『道草』において、一応は「魚と獣」ほどにも違って見える主人公（作者自身）とその周囲の人々とが、実際はそんなにかけ離れたものでなく、むしろ同じ時代的制約の中に生きるものとしての相似性を多く分け持っているのである。ことを見た作者は、明かに周囲の人々の病いをわが病いと感ずる人であった。「半鐘が鳴ればそれは自分が鳴ったことになる」と説明した「絶対の境地」に、『行人』の主人公は入りたがっていたのであったが、その願いが

こうしてどうやら『道草』の漱石には達成されかけていたのである。そうして入り得た「絶対の境地」——唯一無二の世界から、改めて人生の紅紫緑黄を眺めかえしたところに、上記のようなお延やお秀の扱い方が生れたのである。小林さえ、やや出来そこなってはいるけれど、悪意ばかりの人間として登場させられているのではなく、自然の意志の体現者として登場させられているのであった。

こういう人間の見方は、清子を理想化して他の人々と対比的に扱っている上記のような作為と、一応は明かに

矛盾したものになっている。それが、この作に托された「則天去私」への願いというものを、かなり理解しにくいものになっている。清子の扱い方などに即していえば、それは明かに我執をすてて叡知に生きよということになる。それを小我をすてて大我に生きよという要請なのだろう。といっても同じことであろう。お延やお秀の扱い方の側からいえば、それはいわゆる明暗一如・善悪不二の世界を静かに突き徹して眺め得る心境への願いというのに近いものだということになる。漱石研究の権威小宮豊隆なども、だからその二つのいずれとも片づけかねて、こ

の問題に関する限り何か割切れぬような気もちを見せているのである。

が、その問題も、『道草』の場合と関係づけて見たら、或る程度には片づけられるのではないかと思う。あの作の漱石は、彼自身に周囲の人々と相似た病を見るところを越えて、周囲の人々にもまた彼自身と同じような正しいものや高いものへの思慕があることを見ていた。彼等は考えない、が、考えたのと同じ結論を「野性的」に、即ち本能的に「よく感じ」ている、というのである。それはよくいわれる人間一般における「本態的な叡知」の

発見であろう。長い社会生活によって馴致された、それ故に本能化された叡知であり、公理的な妥当さへの感覚である。『道草』にはそういう叡知の、はげしい我執の相剋を通して、或は相剋の果てに、輝き出す趣が、ほのかながらに捉えられているのである。その点を明かにして、人間的な生のあり方をそういうものだと信ずることが出来たら、一見我執と相剋の連続である人生にも、その究極における明るい可能性の達成を信ずることが出来るのではないか。つまり人生は、争いながら、裁き合いながら、それによって、だんだんによくなるというので

ある。『道草』の漱石はそういう叡知に触れかけていながら、まだその明るい可能性にはつきりした力点を打つことが出来ず、何事の成就にも我執と相剋（闘争）のともなって見える人間の生活に、絶望的な暗さを感じていたのである。ところが、次の『明暗』では、一面にはなおそういう絶望を持ち越しながら、その表題が示している通り、いつの間にか明暗一如（相関）の生のあり方に目をつけて、それが人間としての自然——即ち「天」だと感ずるようになっていたのである。そういう感じ方の奥には、人間的な生の自然はつきつめれば大我を生かし



叡知に生きる可能性を持つものなのだという明るい肯定感が、どうしても揺曳せずにはいけないことになる。それはむろん善悪不二の世界をそういうものとして突放して眺めようとするだけのものではなく、善悪の批判はありながら、従って憤りも悲しみも絶望も不安もありながら、それらをすべて不可避の過程として到達する究極の達成に、仄かな明るさを感じようとするものであるわけだ。人皆にその芽があるから、いよいよよとなれば（生か死かの問題に逢著すれば）清子の勝利が実現せずにはいない、というのである。そういう明るさを信じ、その可能性に

おまかせしようとするところに、「則天去私」の態度があり得たことになるのではないかと思う。上記のように一見矛盾と思われる清子の理想化も、お延やお秀における否定と肯定との微妙なからみ合いも、そう考えれば比較的容易に理解されるのではないかと思う。清子を理想化する反面、そういう理想化とは極めて縁遠く、或る意味では我と誇り（虚栄）との権化であるようなお延が、これもすでに小宮豊隆が想像しているように、最後には、死ぬどころか、かえって大いに勝つことになるかも知れないと思われるような見通しさえ、この『明暗』の中に

は含まれているのである。殺してしまうよりほかなかった藤尾が、ここまで成長して来ているところに、この作と『虞美人草』との距離があるのはいうまでもあるまい。ただ、そうして一面では我執的である生の究極的な明るさや可能性に触れかけているのでありながら、『道草』ではまだその明るさへの味到などには程遠く、かえってそうした可能性と不可分にからみ合った我執の暗さに怖れをなしていたのであった作者は、『明暗』にもなおそういう側面を相当色濃く残していたのである。その怖れや不安から、我執（小我）を断滅して叡知（大我）に生

きよという要請をなお心の底深く澱ませており、従って清子のような理想化された人間像を提示せずにはいられなかつた作者は、その理想的人間像に対置された人々が、結局は相似た道を行くのでありながら、その道をすなおに歩くことが出来ず、やはり我執的相剋的にしかたどれないものなのだというところに、不安と絶望と諦観とを寄せずにはいられなかつたのである。だから作者はまだ、明るくほほ笑むかわりに、わずかに冷たい微笑を含みながら苛辣な探究を続ける以上のことが出来なかつたのである。そこになお歩み残された一步があつたことになる

のであり、その過程的な錯雑がこの作の世界を割切りにくいものになっているのだと思う。

そういうところを越えて、相剋や闘いを孕みながら結局は朋るく展開して行く生への揺ぎない信頼を持つところまで行ったら、彼の作品も、我執的な人々への嫌悪を底深く蔵していたり、不安や怖れのなお色濃く漂っていたりする『明暗』のそれとは味いのよほど違った、もつと澄んだ明るさを持つものとなるだろう。そこまで行つたとき、それはまた『虞美人草』との相似を思わせる理想化や作為主義なども越えて、彼のそもそもその出発点

であった『猫』のような、もっと自然で全円的な、しかも厳しい造型を含んだものとなつたのではないかと思う。『虞美人草』や『明暗』よりもっと広い世界を見渡したあの作で、彼はすでに凌ごう凌ごうとする意欲——つまり我執をすべての根抵と見ていた。それを醜く怖ろしいと感じていた。しかもそれが他ひとばかりではない苦沙彌先生自身の問題であることをも知っていた。そうしてその我執と融合つた明るい可能性などというものはまだ全然見ていなかったのである。それ故の絶望と問題の処置なささが彼を俳諧的な笑いに逃れさせたのだ。そうい

う作品をもって出発しながら、その後の彼はそこに示されてきた自照性を忘れて問題を他の上にばかり見てこれを裁こうとするか、でなければそれを何とか糊塗しておこうとするような態度ばかりを多くとった。それが、『坑夫』や『それから』の中期を経てもう一度厳しい自照にかえった後は、主としてその道を狭く鋭く内側につきつめて行ったあげく、『道草』で『猫』時代の自分自身の生活を厳しく検討し直したのを契機に、『猫』にはなかった可能性に仄かながら触れたのである。そうして書かれた最後の大作『明暗』において、初期時代の彼の世界

を極く一通りに綜観したとも見られる『虞美人草』に對  
応するような、広い人世展望とその展望を要約すべき結  
論とを見せかけたのでありながら、その可能性への触れ  
方にまだおぼめかしいものがあつたため、暗い否定觀か  
ら来るものを脱却しきれなかつたのである。そこからの  
一步前進が実現されたら、一見我執的な相剋と闘いとを  
通しながら、結局は明るく発展して行く生のすがたを、  
いわゆる暗さを通した明るさを持ったものとして、陰翳  
深く刻み上げることが出来たろう。そこに期待されるも  
のが、より深化されるとともににより積極化された『猫』



の世界ではなかったかと思われるのである。

といっても、『道草』でも『明暗』でもなお否定観を乗越しきれなかった漱石には、やはりそういう飛躍は難事であったのかも知れない。『こゝろ』の先生を明治の精神に殉死させた彼は、新しい時代を積極的な肯定において生き得た人ではまだなかった。それが事によるとお延を死なせるのかも知れないというような危懼をも全面的には否定させないのである。そのくらいだから、彼は容易に人生を発展としてつかむことが出来なかった。

『門』や『道草』の結末などが明示している通り、とも

すればこれを暗い輪廻としてのみつかもうとしていた。だからこそ彼の理想を托した人間像は清子のような趣のものではなければならなかったわけだし、人間的な意志や智慧などすべて否定したかのような「則天去私」などという言葉を箴言として選ぶことにもなったのであろう。どこまで行ったところで彼はやはり悲しくあきらめたような淋しい笑いを浮べるだけの人でしかなかったのかも知れないと思うし、とすれば、『猫』により明るく積極的な気魄を盛りこむということは、あるいは期待出来ぬことになるのかも知れないとも思う。が、それにしても、

ブルジョアと知識人の対決とか、東西文化の比較とか、個人主義と家の問題とかいう数々の題目をその中に含んでいた『猫』の世界が——そこに語られたような歴史の展開が、『明暗』を経た後の周到さと陰翳深さをもつて展望し直されることになったら、漱石の文学なり世界なりが、容易に比儔を見ぬほど熟しきったものになることも、おそらく否定出来まいと思う。その生涯の終りにおいて『虞美人草』まで踏みかえして来たように見える『明暗』から見れば、それがもうわずかの距離でしかなかったのに、それを実現させなかつた漱石の死は、やは

り少し早過ぎたのだと思う。ましてそこには、その心境における飛躍的な一転歩（積極化）さえ、絶対に期待出来ぬというのでもなかったようなものさえ、ほの見えていたのだから、その感はなおさらに深いわけである。

（昭和二十六年九月『現代日本小説大系』月報）





日本文学電子図書館

---

## 夏目漱石の作品

著 者：片岡良一

制作者：宮澤一郎

出版社：鷺の宮書店

昭和42年12月15日 印刷

昭和42年12月20日 発行

---

日本文学電子図書館